

取調室

中野
劇団

取調室

作・中野 守 (中野劇団)

登場人物

刑事 A

刑事 B

山崎

取調室。刑事 A と容疑者の山崎が机を挟んで向かい合っている。刑事 B は調書を取っている。

刑事 B の携帯に着信。

刑事 B

(電話に出て) はい。……はい。え? ……唇紋? わかりました。

(電話を切る) マルさん。

刑事B、刑事Aに耳打ち。

刑事B「鑑識から連絡があつて、ガイシャの部屋のドアノブから山崎の唇紋が出たそうです」

刑事A「指紋か」

刑事B「唇紋です」

刑事A「しんもん？」

刑事B、唇を差す。

刑事A「わかった」

刑事A 山崎。……殺された比嘉愛理沙ひがありささんの部屋のドアノブを鑑識が調

べたところ、おまえの唇紋しんもんがついていたらしい。

山崎 指紋？

刑事A 唇紋だ。

山崎 シンモン？

刑事A 唇だよ。唇の紋様。同じ指紋が世界で二人としないように、同じ唇紋を持つ人間も世界に二人としないんだよ。つまり山崎、おま

えが被害者の家にいたという物的証拠になるんだよ。

何言ってるんだよ。

山崎 刑事A 証拠を前にしてまだシラを切りとおすか。

山崎 わけわかんねえこと言ってるじゃねえよ。

刑事A おまえの唇紋がついてたんだよ！

山崎 知らねえよ！

刑事A おまえがつけたんだよ！

山崎 つけてねえよ。

刑事A ドアノブにチュツてやったんだろうが！

山崎 やってねえよ！ どういう事情でドアノブに唇をつけるんだよ。

刑事A 捜査を攪乱させるためじゃないのか！

山崎 しねえよ！ 攪乱されてんじゃねえよ！

刑事A 何でドアノブにチュツてしたんだ！

山崎 こっちが聞きてえよ！

刑事A 比嘉愛理沙さんを殺してしまって、それで動揺してドアノブに

チュってしたんじゃないのか！

なるか!? そんな風に。動揺してドアノブに口づけって。

山崎 刑事A どうしてもチュってしたくなるドアノブだったんじゃないのか！

刑事B マルさん！ マルさん！

山崎 わかんねえよその感情。何なんだよこの人。変えてくれよ。

刑事A ドアノブにキスする性癖がある奴が世の中にひとりくらいいても

おかしくない。

いたとしても俺じゃねえよ！

山崎 刑事A ドアノブに性的な興奮を感じてるんじゃないのか！

山崎 感じてねえよ！

刑事A あの子が触ったドアノブ、みたいな、そういうんじゃないのか！

山崎 適当なこと言ってんじゃないやねえよ！ 何処にいるんだよ。ドアノブ

に対して、性的に興奮する奴。何で人殺した後にドアノブで興奮

してんだよ。おかしいだろ。

刑事A じゃあ落ち着くためじゃないのか。

山崎 ドアノブにキスして落ち着くとかあるのかよ。

刑事A こっちが聞いてるんだ！

山崎 知らねえよ！

刑事A 愛理沙さんと付き合ってたんだよな、山崎。

山崎 ……。

刑事A そんなに長続きしなかった。おまえが愛理沙さんにフラれたそう

だな。しかし、おまえは愛理沙さんのことが忘れられなかった。

愛理沙さんとよりを戻したくて彼女の部屋に行った。しかし愛理

沙さんの方はおまえに対しては、もうそういった感情は残ってい

なかった。もしかしたらおまえに冷たい言葉を発したのかもしれない。

絶望したおまえはそばにあった延長コードで彼女の首を絞

めた。最初は単なる脅しのつもりだったのかもしれないが、卑怯

さを愛理沙さんに非難され、それで逆上したおまえは殺意をもっ

て愛理沙さんの首に巻きつけているコードを握る手に力を込めた。

愛理沙さんは動かななくなった。本当に殺してしまっただけで怖くなっ

たおまえは慌てて部屋を出た。その去り際にドアノブにチュッてした。

山崎

おかしいだろ！ 自分で言ってる途中でおかしいって思わないのかよ！

刑事A

愛理沙さんの首をカ一杯絞めた。そして動かなくなった比嘉さんにお前は口づけをした。しかし唇を離すと目の前には比嘉さんじゃなくてドアノブがあった。

山崎

間違えるわけないだろ！

刑事A

じゃあ何故唇紋がドアノブに残ってたんだ！

山崎

知らねえよ！

刑事A

誰かに唇のコピーを取られた覚えは？

山崎

何だよ唇のコピーって。

刑事A

誰かに唇を奪われたんじゃないのか！

山崎

意味変わってんじゃないか！

刑事A

デスマスクみたいに型をとって！

山崎 何のためにそこまでするんだよ！

刑事A 捜査を攪乱するためだろうが！

山崎 どれだけ攪乱されてんだよ！

刑事A おまえが犯人だろうが！

山崎 違うって言うてるだろ！

刑事A おまえの唇紋だって鑑識が言ってるんだ！

刑事B マルさん。マルさん。

刑事A 何だ。ポシエット。

刑事B ドアノブにキスしたいから殺したのでは？

刑事A ハッ！

山崎 おまえらしい加減にしろよ。

刑事Bの携帯が鳴る。

刑事B すいません。(電話に出る)はい。……え？　そうですか。……はい、

わかりました。ありがとうございます。(電話を切る) マルさん。

刑事A ?

刑事B、申し訳なさそうに耳打ち。

刑事A そうか。わかった。

山崎 ?

刑事A 山崎。すまない。聞き違いだった。

山崎 え？

刑事A ドアノブについていたのは唇紋様じゃなくて、指紋だった。

山崎 だよな！

刑事A 指紋だ。

山崎 唇なんかつけるわけないだろ。

刑事B ごめんなさい。唇紋って聞こえて……。滑舌が悪かったから。

山崎 ホントふざけんなよ。

刑事A ……おまえの指紋だな。

山崎 ……はい。

刑事A おまえが殺ったんだな。

山崎 俺がやりました。

刑事A 記録とって。十九時十分自供。

刑事B はい。

終わり。